



【主題名】 本当の自由とは
【教材名】 うばわれた自由
 (私たちの道徳 5・6年 文部科学省)



教材研究する度に新たな気付きがあることを実感！
 自分一人ではたどり着けないところへたどり着きました。



授業者 大西 由夏 教諭 (南国市立岡豊小学校) **内容項目** 【善悪の判断、自律、自由と責任】

本時のねらい
 ◇ジェラール王子の思いを通して、「本当の『本当の自由』」について考え、自律的で責任ある行動をしようとする態度を育てる。

指導の要点
 「自由」に対する捉え方や振る舞い方について、これまでの自分がどうだったか自分に問いかけ、本当の意味での自由の在り方について自覚したことを今後の生活に活かしていくことができるようにしていく。

授業を通して引き出したい児童の考え

- ◇「自由」は楽しいことだけだと思っていたが、違うことに気付いた。
- ◇「自由」は自分の行動を自分で決められることだが、先のことを考えて行動し、その行動には責任を持たなければならない。
- ◇自由に決められる時には、楽しくするために、自分でしっかり考えよう。 ※

本時の展開	児童の反応
学習活動と主な発問 ○発問 ◆補助発問・問い返し	
1 「自由」についての事前アンケート結果を見る。	・自分の好きなことができる ・宿題がない ・何をしても怒られない ・楽しいイメージ
2 王子の言う「自由」について考える。 ○王子の「自由」ってどんな自由だろう	・自分の好きなことができること・自分勝手に振舞うこと ・王子の自由と学級アンケートの自由が同じだ(気付き)
3 王子の涙の理由を考える。 ○牢屋で番人と再会し、涙を流した王子はどんなことを思ったでしょう	・あの時、森番の言うことを聞いておけばよかった ・なぜ自分のわがままを止められなかったのだろう(後悔と反省)
4 森番の言う「本当の自由」について考える。 ○「本当の自由」とはどんなことだと思いますか。 ◆我慢すること、決まりを守ること、勝手にしないことが自由なの？	・人に迷惑をかけないように行動すること ・自分勝手にしないこと ・わがままを言わないこと ・注意を聞くこと
5 本当の意味での「本当の自由」についてグループ協議を通して考える。 ○5年生の「本当の『本当の自由』」を探してみよう。	・好きなことはしていいけど、どこまでやっていいかは自分で決める ・好きにしている時といけない時の区別を自分で考える ・自分がしっかり考えて行動すること
6 学習をふり返り、自分の考えをノートに書く。	※上記(授業を通して引き出したい児童の考え)

児童から引き出された「本当の自由」◎中心発問における実際の児童の反応

楽しくて自分がやりたいことも自由やし、やったらいかなこと決まりを守ること自由。それが1つになって自由。	遊ぶときは遊んで決まりを守るときは守るように、ちゃんとメリハリをつけること、王子の自由は自分さえよければいいけど、みんなが楽しくできるようにしたい。
決まりの中で縛られずに生きること。	みんなが自分のことを自分で考えるのが自由。
ルールの中で楽しむことだと思う。	自分で自分の気持ちをコントロールしたらいいと思う。
いじめをなくして、嫌な気持ちになる人が一人もおらんようにしたら、みんなが楽しくすごせると思う。	自分がルールを守ったら人が自由になれるし、他の人がルールを守ったら自分が自由になると思います。



授業づくりのポイント

①自分自身との関わりで考えるための工夫
 「自由とは？」についての学級アンケート結果と、教材の登場人物の自由に対する考えを比較し、現在の自由に対する自己の捉えを見つめる。
 楽しければいい、自分の好きにできる等、自分の考えていた「自由」が王子と同じ自分勝手な「自由」であることに気付いた子供たちは、「本当の自由」を考えることに必然性を見出し、自分事として思考し始める。



②多面的・多角的に捉えるための工夫
 教材を通して学級で出した答え「自由とは、わがままをしないことや決まりを守ること」に違和感を持つ子供たち。「そんな自由は嫌だ！」ざわめきをきっかけに、問い(中心発問)が投げかけられる。「では、5年1組が考える本当の(意味での)『本当の自由』とはどのようなものなの？」から始まったグループ協議。自分にとって、友達にとって、みんなが自由を公平に保障し合うためには…立場や視点を変えながら多様な意見が出され、新たな気付きが共有された。

③主題に迫るための工夫 ～子供の問題意識はどこで生まれるか！？～
 「5年1組はこの自由(わがままをしない・決まりを守る)で過ごしていこうね」「えっ？そういうことじゃないで先生！」
 効果的に働いた揺さぶりの場面である。考えたい問いを生み出す過程をどう仕組んでいくか。そして、それを自然に引き出していくためには…？
 実践例は様々あるが、児童の実態を的確に捉えていることが前提であるがゆえに、答えは子供の反応にある。主題に迫るためには、児童の思考の流れをいかにリアルに想定できるかが重要なポイントである。”こう問われて、本当にこのようなことをこの学級の子供は感じるのか？”と、児童の受け取りを多様に想定しつつ、発問を吟味する。そのために、模擬授業は、授業者側から子供側の視点へシフトするという意味においても大きな意義を持つ。



講師による指導・助言(高知大学 森 有希 准教授) **教材分析は道徳的価値レベルまで**

明確な指導の要点 ⇔ 引き出したい児童生徒の考え ⇔ 児童の実態を捉えた反応予測 ⇒⇒発問の吟味

▼ 教材レベル	わがまま勝手をする、牢屋に入れられるような報いがある。
▼ 読解レベル	迷惑をかけたり決まりを破ったりすることは、本当の自由ではない。
▼ 道徳的価値レベル	自律的に善悪や限度を判断する「自由」には責任が伴うことを自覚したうえで、自由を大切にしたい自分自身の生き方について考える。